



IRRI (国際稲作研究所) だより

高村 泰雄

IRRI (International Rice Research Institute) には日本からもすでに多くの研究者が来訪している。また研究生活を経験した人の数も多い。しかし、私の知るかぎりでは当研究所に対する評価はまちまちのようである。採点のからいばあいが多い。これは専門分野についての学問的な評価、研究所の背景とその運営方針に対する批判、さらには研究所のおかれているフィリピンという土地に対する感想などがそれぞれ重なり合っているためであろう。私は昨年11月に当研究所に1年間の research fellow としてでかけてきて以来、約5カ月間をここにすごしたことになる。研究所のことについてはまだまだ十分に理解するところまではきていないが一応その様子をお伝えしたいとおもう。

IRRI はマニラから南40マイルのロスバニョスにあり、通称カレッジと呼ばれる UPCA (University of Philippine, College of Agriculture) の敷地に隣接して研究所ならびにその実験農場が設置されている。UPCA の構内は、ひとたびは戦火のために荒廃したときくが、今はヤシの並木、緑の芝生を背景に、

赤い屋根の教室や研究室が点在し、はなはだ閑静な雰囲気をもっている。この構内をぬけ、並木道をなおもゆくと IRRI の白い建物と農場がみえるが、このあたりはいささか殺風景。左右に一对の平屋建の本部と研究室棟である。正面にある三階建ては食堂と男子寄宿舍。少しはなれてやや小さい二階建の女子寄宿舍。そのさきにある工場のような建物は実験農場運営に欠かせないサービス・ビルディングである。グリーンハウスおよび育種用のスクリーンハウス群は寄宿舍の裏側にある。前庭の円型池には、土曜から日曜にかけて見物客の多いときなどに空高く水を噴き上げて愛敬をみせる噴水がある。ココナツ林に囲まれた農場は、水田、畑あわせて80ヘクタール、よく整備された灌がい水路と2台の車がすれちがえる広い道で縦横に区切られており、おもだった四つ辻には白い標識が立っている。土壌は少し黒味をおびた灰褐色で、Maahas clay とよばれ、やや酸性である。近くにみえるバナハウ山 (2100m) は死火山であり、すぐ裏手のマツキリン山 (1200m) も多分は火山のなれのはてではないかとおもわれる。ロスバニョスとはスペイン語で温泉のことだときいた。

研究所の設立着手は1960年4月で、開所は1962年2月7日。フォード、ロックフェラー両財団ならびにフィリピン政府の協力にもとづいている。フォード財団は土地、建造物および機械器具類のために715万ドル、運営費として75万ドルを投じた。ロックフェラー財団は年間約50万ドルを研究所の運営費として支出しているという。設立目的は稲についての基礎的研究はもと

より、稲の生産、配分およびその利用に関する一切の研究を通じてアジアおよびその他の稲作地帯の住民に栄養的かつ経済的な利益をもたらすこととなっている。また同時に、東南アジア諸国の若い科学者に稲作研究に関するトレーニングを与えること、米の問題について科学者の国際協力を推進し、情報資料センターの役割をはたすことも目的としている。

研究所の理事会は、フォード財団の Vice President F. F. Hill 氏以下、アメリカ、フィリピン、日本、インド、タイ、台湾の各国からの計10名の理事によって構成されている。日本の現理事は北海道大学石塚喜明博士で、木原均博士のあとをついでおられる。研究所長の Dr. F. Chandler, Jr. は理事の一人でもあり、副所長の Dr. A. C. McClung とともに土壌学畑の出身。なお Dr. Chandler はフルブライト留学生の受け入れなどを通じて日本にもなじみの深い人だときいた。コーネル大学で教鞭をとったこともあるときくが、研究所に傾ける情熱は強く、しばしば稲作改善についてこぶしを振りあげて熱弁をはく。スタッフ・メンバーは大きくわけて管理運営担当、研究担当にわけられる。前者についてはくわしく述べるまでもないが、会計、渉外、庶務にわかれ、マニラホテル内にあるマニラオフィスを連絡所として活動している。なにぶんにもいなかなので、不便な交通通信関係を円滑に維持するため郵便局が研究所内にあり、毎日 Mail car がマニラとロスバニヨスとの間を往復している。そのほか、施設、交通、守衛関係などのセクションさらには

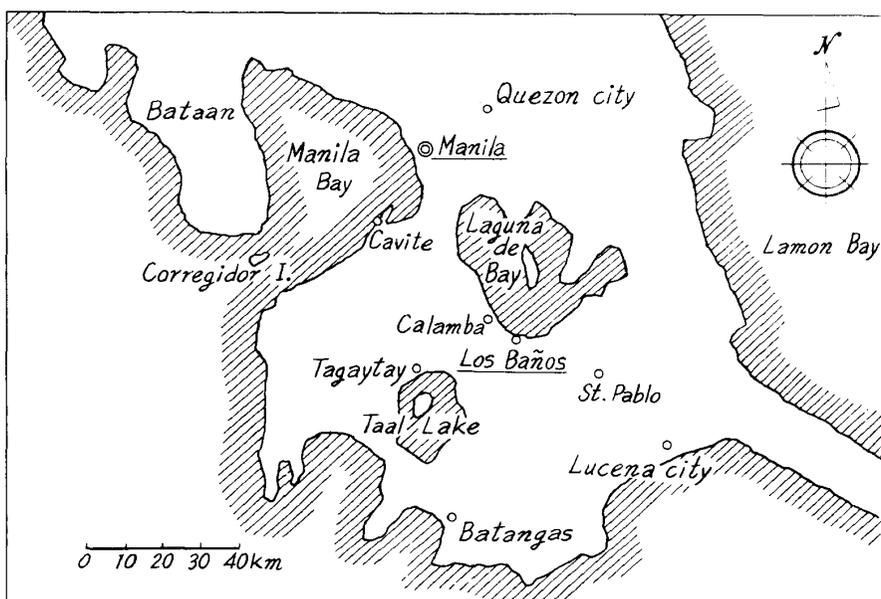
多数の宿泊者を擁するために食糧および宿舎の管理部がおかれている。

さて、主体をなす研究組織はいくつかのデパートメントからなりたっている。各デパートの長ならびにその associate が研究所のスタッフメンバーである。現在までに、もっともめざましい業績をあげたのは plant physiology であろう。その長、北大農学部助教授の田中明博士の熱帯稲作に関する研究はすでに有名であるが、最近その一連の業績は“Growth Habit of the Rice Plant in the Tropical and its Effect on Nitrogen Response”として IRRI 報告書のかたちで出版された。熱帯稲の生育、その栄養吸収に関するぼう大な研究の成果が示されており、この研究によって、たとえば、しばしば問題となってきた窒素多施用にもとづく減収の機構なども明解に説明される。またその研究の結果導き出された短稈、分けつ性中程度、直立短葉という熱帯稲として望ましい草型についてのモデルは育種グループによっても全面的賛同をえている。すでに次のステップとして、いわゆる生理病としてひとくちに片づけられている問題を、土壌学的、植物栄養学的な見地に立ってさらに明解にしようと考えておられるようである。

Chemistry は最近まで名大助教授赤沢堯博士が、その長であったが、任期を終えて帰国され、後任の名取博士の到着をまっている。研究の重点は現代生化学の重要な問題のひとつである澱粉の生合成におかれ、植物の光合成における葉中蛋白の役割、とくに Fraction-1

蛋白の特性についてかずかずの研究がおこなわれた。

Varietal improvement は H. H. Beachel 氏 (U.S.A.) の Plant breeding, Dr. T. T. Chan (台湾) の Genetics からなっている。ばく大な数の交配組合わせの中からすでにヴェイラス病、めい虫害、倒伏などに対する抵抗性をもった上、望ましい草型を備えた品種が育成されつつある。台湾のいわゆる蓬萊種と在来の *Indica* が交配親として用いられることが多い。Genetics は倒伏抵抗性の導入



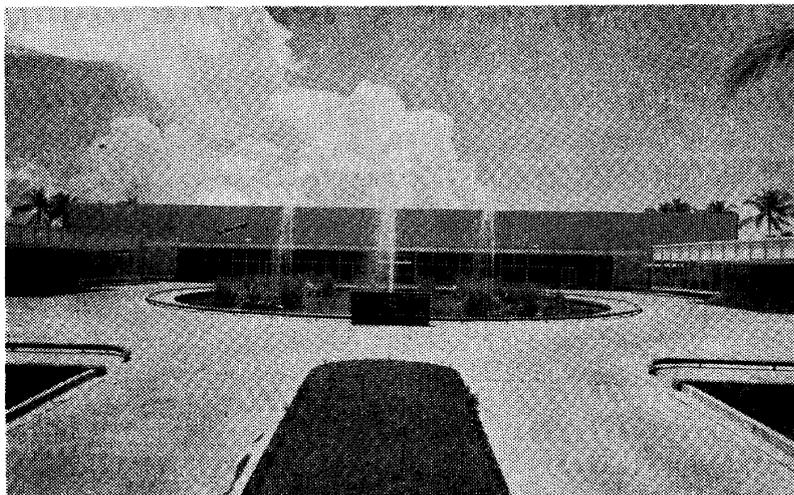


写真1 IRRI の正面。左から本部，寄宿舎，研究室

について研究し、また *Japonica Indica* 間のかけ合わせの結果えられる種子稔性の悪さの原因追求などもおこなっている。なお、世界各地からの野生稲のコレクションがあり、各国との種子交換事業も活潑のようである。

Plant protection は Dr.S.H.Ou(台湾) の Plant pathology と Dr. M.D. Pathak (インド) の Entomology にわかれている。Pathology には最近まで元農技研、現在は植物ウイルス研究所におられる飯田俊武博士が客員研究者として1年間滞在され、ウイルス病の分類と水稻品種のウイルス抵抗性検定試験の指導にあたられた。そのほか、熱帯におけるイモチ病、バクテリア病の基礎的、応用的研究がすすめられている。Entomology ではこれに関連してウンカ、ヨコバイ、メイ虫防除の研究をおこなっていることはいうまでもない。なおウイルス病による被害は水稻の多毛作化にともなって増大するようで、その防除は、今後の熱帯稲作にとってはなはだやっかいな問題となるのではないかとおもわれる。研究所では約2週間おきに SEVIN (有機リン剤) を撒布して、媒介昆虫のウンカ類発生をおさえることにつとめているが、農家にこれをすぐに実行させようかどうかは問題のようだ。

さて Agronomy は私の所属するデパートである。ボスの Dr. Moomaw (U.S.A.) にあらためて研究の重点をどこにおくかと質問したところ、かれは現在実施中の各試験のほとんどすべてを挙げた。つまり、水稻の年間2乃至3回作付け、または他作物たとえばト

ウモロコシ、苧類、緑肥作物との輪作による年間収量の増大；殺草剤の選択試験、品種とその最適栽植密度、土壌の肥沃度と施肥方法、直播栽培試験などである。私には全般的に大味な試験が多いようにおもわれる。しかし、Dr. Moomaw は日本式の稲作研究を試みることを必ずしも必要だとは思っていないのかもしれない。なお私は現在のところ圃場試験として、生育時期別の低照度が収量を低下させる機構を直播栽培下で調査している。雨期の低収性を光不足の面から追ってみたいと思う。また熱帯地方にはつきものいわ

ゆる高温の水稻生育収量に対する功罪の研究も試みているが、正直のところ、一年の滞在期間中に熱帯稲作の問題点をまがりなりにもつかむことで精一杯ではなからうかと恐れている。

Soil chemistry では Dr. F. N. Ponnaperuma (セイロン) が水田土壌の特性をさらに明らかにするための研究をおこなっているが、その方法論はおおむね日本の研究者によって確立されたものと大差はないようである。土壌中の各種無機イオンの行動の研究が主体である。Soil Microbiology は Dr.I.C. MacRae (オーストラリア) が担当している。

Agricultural Economics の Dr.V.W. Ruttan は東南アジアにおける耕地面積拡大と米生産量増大の可能性、米の国際市場と価格政策の研究をはじめ、フィリピンの米生産の実態分析などもおこなっている。Agricultural Engineering は Mr.L. Johnson(U.S.A.) が水田用農業機械の改良、灌漑水量についての研究をつづけている。日本製のティラーを使っての水田耕起整地のテストもずいぶん試みられている。

Statistics は Dr. B. T. Oñate (フィリピン) が、稲作研究に関係する統計学的な問題の研究にあたりるとともに、他の研究室が企画する実験計画の立案と結果の分析について援助、協力をしている。そのほか Experimental Farm は各研究室が企画する圃場試験のため土地の整備、雑草防除、病虫害の防除をひきうける。また他の研究室と協同で、ときには独自で比較的大がかりな生産試験を担当する。そのほか広報活動は Communication office があり、見学者の案内

から研究成果の宣伝などにあたっている。

つぎにスタッフ以外の人員構成は、各研究室とも数名の assistant, 各国からの scholar ならびに fellow からなっている。assistant はすべてフィリピン人の大学卒業生。女性も多い。scholar は大半が研究所で研究を行ないつつ、近くの UPCA で修士コースに在学しその講義、セミナーに出席する。修士取得のためには IRRI での研究が6単位、講義ほか24単位が必要で、この中には英語以外の外国語も必修として含まれる。以上をだいたい2年間で修了。その間必要な図書と大学に支払う研究料ならびに生活費を IRRI が負担している。現在フィリピンの26名、台湾の11名、タイ、韓国の各5名をはじめ、ベトナム、インドネシア、マレーシア、インド、パキスタン、セイロンの10国から54名の scholar が集まっている。大学の講義に出席するときには研究所のバスが送迎するが、早いクラスは午前7時、遅いクラスは夜の7時とまちまちで、試験が近づくと研究所での実験とともに忙しさを送る。われわれ research fellow はそれぞれ自己の研究テーマをもって研究室の仕事を担当しているが、研究室長次第で仕事がうまく伸びるかどうかがきまってくる場合が多いようである。説得力のある明確なテーマを示さないと少々つらいおもいをすることがある。research fellow は日本、インド各3名、フィリピン2名、韓国、パキスタン、アメリカ各1名であるが、滞在期間は6カ月から2年くらいまでである。このほか、研究室によっては visiting scientist が滞在し、スタッフに協力して研究企画、遂行に関与する。現在までに日本からは農林省、遺伝研、大学関係合わせて10数名が滞在研究に従事したが、うち2名が visiting scientist で他は fellow である。一時は日本人が非常に多く日本軍の捲き返しだと冗談を言ったそうだが、それぞれ目ざましい活躍をして引き揚げて行かれたようだ。現在はわずかに3名。水稻種子の休眠問題を扱っておられる東北大農研助教授高橋義人博士、細胞遺伝学の研究に従事している北大大学院安藤桜嬢と私である。

開設間もない頃から最近まで滞在した人達の話をおきくと、最初の頃はいわ

ゆる対日感情の悪さということをずいぶん気にしたようである。床屋に行ってヒゲをそってもらっているあいだ眼を見開いてカミソリの動きに注意していたとか、夜少し遅く外出から帰ると舎監が心配して門衛のところまで出迎えて待っていてくれたなど。少しずつ時間が状況をかえたのか、近頃ではほとんどそういう心配はない。しかし戦時中日本軍が大量殺りくをおこなった村が近くにあることは事実であり、パターンの死の行進でからも生き延びた人の子供や日本軍の手で虐殺された人の子供が研究所内にもいることは事実である。若い世代はすでに昔を多く語らないけれどもフィリピンの連中と話しているときにはふとかげらの心の底に沈積しているものに気づくことがある。

さて研究所の寄宿舍は2人1部屋で一応ホテル形式になっている。各部屋に一寸したベランダもあるが大体において窓を締め、ルーム・クーラーをかけたことが多いようだ。食堂は食事の時間が決まっておりますセルフサービス。日本人はおよそなんでも食べるが、そういうわけにゆかない人のためにはまた特別食が作られてなかなか大変である。仕事ははじめは8時で、昼食の1時間をのぞいて5時までが勤務時間。私のように圃場に出て仕事をする者は農夫が朝7時から夕方4時まで就労となっているため朝寝坊ができない。フォードの小型トラックが何台もサービスビルディングから出てゆく朝のひとは活気にあふれている。余りなれない連中まで運転するので時折トラックが水路に落ち込んでエンコしている。守衛の自動車が巡回しており、押したりひいたりして救助はお手のものである。



写真2 農場の管理運営用のサービス・ビルディング



写真3 1年3毛作栽培の水田

農場では野ネズミの害が一時ひどく出たのでいろいろ工夫した結果、水路をわたって来た濡れネズミが田んぼに入ろうとするところに20cm巾の金網をはりめぐらし、蓄電池で電流を流して防戦しようや成功した。ひと晩のうち全農場で300匹以上のネズミが網にかかったことがある。但し最近タガログ語で金網に注意の張り紙があちこちに見られるので、きいたところ農夫が感電した事故があったのだという。雀害とともにネズミの害は熱帯地方のあちこちで問題になっている。一日の仕事をおえて各人が部屋にひきあげる頃には南国の夕陽がココナツの林を赤く照らしている。テニス、バレー、バスケットと元気のよい連中は夕方のひとときを楽しむ。木曜日の夜は映画をみせる。悪く言えば閉鎖された社会だが、1日24時間を仕事に当てるのも好み次第という仕組みでもある。

図書館は世界各国から農学関係の図書、雑誌類を数多く集めており、マイクロフィルムによる文献整理もかなりよくできている。日本の各学会誌、紀要のたぐいもずいぶん揃っている。日本語で書かれた文献のうち必要なものは日本で英語に訳され次々と送られている。図書館は夜の10時まで開館しており利用者は研究所内外をとわずかなり多い。刊行物は現在までのところ *Technical Bulletin* が既述の田中博士ほかの著をふくめて3冊。また *International Bibliography of Rice Research* (1963) は今後も出版の予定ときく。また研究所は国際会議の場として利用されることもしばしばで、すでに稲の遺伝ならびに細胞遺伝学、イモチ病、稲の無機栄養学などに関するシンポジウム

が開催されているが、それぞれのシンポジウムごとにその報告書がまとめられ刊行されている。2カ月に一度 *The IRRI Reporter* というパンフレットが研究所の近況を報じ、毎週水曜日には *The IRRI Calender* がセミナー予告、来訪者予告、関係者の旅行予定などを伝える。こういう仕事だけでもたいそう手間と金がかかっていることだろうとおもう。

研究所で開かれる定期セミナーは木曜日と土曜日である。木曜セミナーは公開に近いかたちで、研究所のスタッフ、visiting scientist をはじめフィ

リピンの農業、農学関係者が講演する。ときにはたまたま立ち寄った科学者の講演もあり、最近ではニンジンの細胞から独立したニンジン分を分化発達させることに成功した Dr. Steward が沢山のスライドを見せてくれた。最近はややフィリピンの農業、社会問題を取りあげたセミナーが多く、稲作研究の立場からは少々迫力に乏しい感じがする。土曜日セミナーはスタッフ、または scholar がそれぞれの専門に関して論じる。主として scholar の教育が主目的であるが、いずれの場合も約1時間の講演、約30分間の討論を通じて全員が共通の問題に取り組む。

さてこのセミナーには研究所内で平常みかけないアメリカ人がよくやって来る。かれらはフィリピン大学と姉妹校となったコーネル大学からの交換教授であり、大学院学生たちである。両大学が姉妹校となったのは1952年ときくが、現在ではUPCAの敷地内に立派な居住区をもっている。またこの両大学の結びつきについては当初からアメリカ政府のバックアップがあったのはいうまでもない。そしてIRRIのスタッフメンバーの多くが実はコーネル大学の出身者なのである。IRRIがかかっている東南アジアをはじめとする稲作地帯全般の生産性の向上という言葉のうちには、まずフィリピン農業の問題を求心的に取りあげてその農業生産性を高めて市場の開拓を長期的に試みつつ、一方ではアメリカの東南アジア政策のうちとくに農業問題に関する橋頭堡づくりに努めるという意図が秘められているのではないかという声もある。日本人が東南アジアの農業の現状に照らして手取り除草を奨励す

るとき、アメリカ人たちは除草剤の使用を一枚加えた農作業体系を考えようとする。それは異なった国で異なった農業の発達段階を経験した人間の考え方のちがひによるものと言ってしまうればそれまでであろう。しかししたとえば IRRI の尿素肥料の試験が Esso の援助のもとにおこなわれているというようなことをきくとつい疑い深くなる。東南アジア諸国がその農業発達を通じて最も望ましい型でそれぞれ独立して生きてゆく道を共に探るといふようなことは時代おくれの思想だろうか。またマレーシアの scholar がさる日私に話した。「アメリカは金ばかり費やしたがけっきょく何も残さなかった。日本の研究者は金をほとんど使わずにすでに MALINJA を作った」と。

なお、スタッフは東南アジア各国の土壤、病理問題などの視察、共同研究のため国外旅行をすることが多い。また fellow, scholar にも研究目的にかなうかぎり旅行をする機会を与えている。また旅行途中で立寄った見学者の宿泊ならびに以後の旅行に対するサービスもゆきとどいていふ。その地理的位置、機能を考えるとき稲作研究のみならず、東南アジア諸地域の総合的研究をすすめる際においてこの研究所のもつ意義は注目してよいとおもう。また研究所側としても各国からの来訪者との真剣な討論をのぞんでいるようである。こうした意味から、いろいろの批判は今日の段階であるにしても、特に日本の熱帯アジア稲作の研究者が IRRI と連絡をしながら研究を進めてゆく価値はあると思う。

研究所の概要はざっと以上のようなものである。しかし東南アジアの複雑な情勢をそのままに反映して研究所のもつ問題もはなはだ複雑であるといえよう。国際研究所を名乗る以上、研究課題はどれかひとつの国の問題に限られてはいない。しかし同時に、まずはフィリピン農業の開発をはなはだ重要視していることも事実である。フィリピン各地の農業試験場と密接な連絡をとり、また選ばれた普及員の再教育を担当している。この国には、Bureau of Plant Industry, Bureau of Soil, さらに Commission of Agricultural Productivity など農林省の各部局があり、独自の機能をはたしてはいるが、それら各部局の技官が scholar として IRRI に学んでいる。研究施設の不備、指導層の手薄さなど考えるとき、それをおぎなうために IRRI が果たす役割は決して小さくはない。ところがフィリピンの政府関係者からは、ときおり IRRI のよ

うに金に絲目をつけないところの研究がどれだけ現場に適用できるだろうかといった批判も耳にする。また研究所の Breeder によって育成された品種を IRRI-1 号とでも名づけて現場におろすという噂のあったとき、一部ではそういうことは研究所が独自でやらずにこの国の農林省に材料として提供するかたちをとるべきだ、という声をきいた。それは研究所の稲作研究の科学的な立場を行政から切りはなして堅持すべし、ということ、また同時に研究所奨励品種が若し現場で思いがけぬ欠陥を示した場合に研究所の立場がなくなるということでもある。しかし、研究所の当事者としてはフィリピン農業に対するごく具体的な貢献を願っていることは明らかである。また、フィリピン人による水稲栽培の低収性を外国人が批判し、日本では台湾ではという話が出ると、この国の若者たちが小声で「日本ではとか台湾ではとかいふ話ばかり聞かせるな。ここはフィリピンなんだぜ」とささやき合うのをきいた。長期間のスペイン統治のあと今度はアメリカによってその生活を支えられているこの国の人達ではあるが、その胸の中にくすぶりつづけている火のあることをみおとしてはならぬとおもう。

なお最後にこの国の稲作の現状を簡単に紹介しておきたい。耕地面積では稲が最大で 318 万ヘクタール、次いでトウモロコシ、ココナツがそれぞれ 210 万、100 万ヘクタール前後で、ココナツとともに輸出品として重要なサトウキビはわずか 25 万ヘクタールである。稲の平均収量は 1.2 トン/ヘクタールでここ数十年来変化がない。日本の約 5 分の 1 の反収である。しかし、この停滞性を統計の魔術によるものだとする人もある。一方では反収はいくらか増加しつつあるが他方、肥沃でない地帯の開田が進行しているためだといふのである。いずれにせよ肥料・農薬の使用からは遠く、灌漑施設をほとんどもたないことを考えるとき、収量にみられる停滞性は容易に察知できる。なお米作地帯はルソン島に集中しており、作期は殆んどが雨期である。水が得られる限り乾期の栽培が有利であることはいまでもなく、最近 IRRI の試験では最高収量 8.9 トン/ヘクタールが記録された。また年 3 回作によってえられた記録は 14.7 トン/ヘクタールである。よりすすんだ稲作技術が農村に浸透し、かつそれを支える農業政策の発展によってフィリピンが米の輸入国という現状から脱却するのはいつのことであろうか。

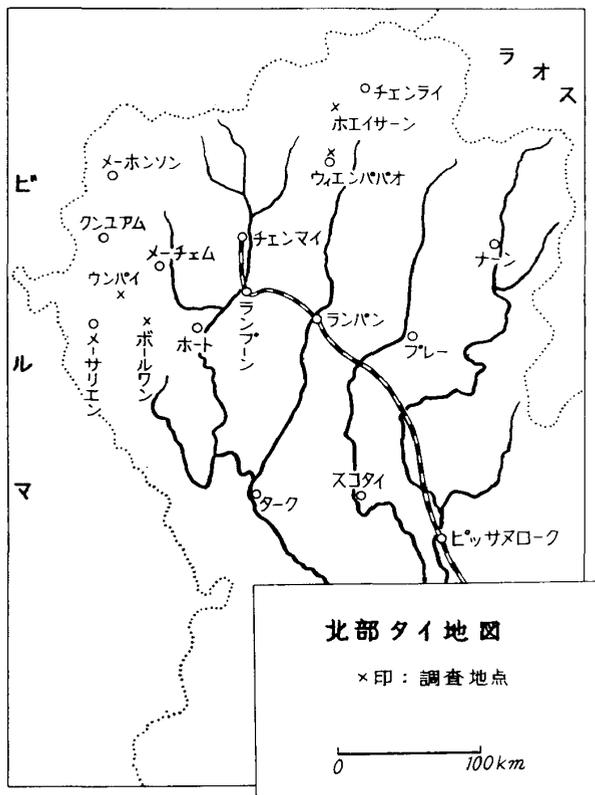
ラワ語の現地調査

三谷 恭之

1 はじめに

私たち4人のグループも事実上すでに解散した。4人というのは、タイ・ビルマ班の飯島助手、言語班の西田助教授、桂君それに私であって、いずれも今回の調査対象は北部タイの山地民である。昨年9月なかば言語班の3人がチェンマイについたとき、その前からカレン族の調査に手をつけておられた飯島さんの発案でホテルの一室を借切つてわれわれのリエゾン・オフィス(?)を設け、これがその後半年近く続いたわけだが、今ではすでに西田先生と飯島さんが帰られ、私自身も帰国まであとひと月たらずだから、本稿も現地通信というより今までの経過報告ということになりそうだ。

なお、このリエゾン・オフィスは何でもないことの



ようだが、これが今回の調査に大いにプラスした。荷物の保管やただの歓談の場所にすぎないのだけれど、村に入っている間も「帰る巣がある」という安心感があるし、ここでお互に得てきた知識の交換もできればバカ話やイタズラをしてゆっくりくつろぐこともできる。とくに私のように現地調査がはじめてのものにとっては、これが精神的な緊張の緩和にどれだけ役立ったか知れない。なお、これは今も桂君と2人で続けている。

2 ポールワン村

さて、アカ語・ラワ語など主としてチベット・ビルマ系の言語を調査される西田先生や桂君と別れて、私は9月末にまずチェンマイの南西約130kmにあるポールワンというラワ族の村に入ることにした。ラワ語はモン・クメル系の言語であって、これまで数編の論文があるにすぎず、それもあまり言語学的ではない。このポールワン村に入るにあたっては、チェンマイからメーサリエンにかけてすでに自分で歩いてよく知っておられた飯島さんのお世話になった。

この村は標高1000m前後のポールワン高原にあって、チェンマイからメーサリエン行きのバスで約5時間、バスを降りた所から見る村の景色はなかなか美しい。村は大きく(約250戸)、家もたいてい木の家でわりと大型である。村の中には雑貨を売る店もあれば機械精米をうけおう家もあって、本格的な山地民の部落からくらべればちょっとした町という感じだ。村人たちの服装もたいてい土地のタイ人(コン・ムアン)と同じで、ときには洋装の娘さんも見かける。この一帯のラワの村は古くからタイ人の影響を受けていたといわれるが、とくに数年前チェンマイ・メーサリエン間のハイウェイができてから一段とモダンになったようだ。

ことばの面でも同様で、たいていのものがカム・ムアン(土地のタイ語、北タイ語)を話せる。たまにカム・ムアンのよくわからない老年者を見つけたが、村人がタイ人と話すときはもちろん、彼らどうしてもカム・ムアンで話しているときがある。(ただ声調や母音の長短の対立はラワ語にそれがいないため多少あやふやで、タイ人にはやはりそれとわかるそうだ。)タイ・クラーン(標準タイ語)のできるものはほとんどないが、今では小学校でも教えているし、ときには次のようなこともあった。



写真1 ピーの家（ボールワン）

ある娘さんが私と話すとき明らかに努力してタイ・クラーンで話そうとつとめていた。これはちょっと田舎のコン・ムアンと全く同じだ。彼らにとっては、タイ・クラーンはバンコックのことばというだけでなく書きことばつまり知識人のことばであって、それだけカッコイイのである。

しかし、もちろんこの村の第一言語はれっきとしたラワ語である。

私は村の小学校の教師の家に下宿して調査をはじめた。「問う」というのはどうかときくと「どこ行くか」と答えるし、「呼ぶ」はときくと「オーイ、こっちへ来い」といった具合で相手に仕事の意味を分からせるのに困ったが、約ひと月半ほどでだいたい輪郭がつかめた。

単語は CV(C) または cvCV(C) [C: 子音またはその結合, V: 母音またはその結合, cv: 強勢のない音節] を基本的な形としており、声調や母音の長短の対立がないのでその分だけ C や V の種類が豊富である。たとえば、C- では両唇音だけでも /p- ph- ?b- mb- m- ?m- hm-/ があり、-V(C) には /-a: -au/, /-a?: -au?/, /-ah: -auh/, /-ap: -aup/ といった対立も見られる。音節についた声調はなくふつう単語

を単独で発音するときは下降型であるが、一部の動詞では上昇型になるものがある。そのため /hlai?↘/ «雨» 対 /hlai?↗/ «雨が降る» といった対立の生じていることがある。しかしこれはむしろイントネーションのひとつと考えられるようだ。

文法体系はだいたい簡単で、名詞化の接頭辞 /pi-/ があるがモン・クメル系の特徴といわれる挿入辞はないし、統辞法も基本的には主語—動詞—客語、被修飾語—修飾語といった語順である。ただ、主語に対応して代名詞的小辞が述語動詞の次におかれたりする。

3 ウンパイ行き

ラワ族のもうひとつの中心地はウンパイだ。ラワ研究者の間でボールワンについて有名なところだ。言語についても Sanidh Rangsit の論文があってラワ語に関する文献では最もすぐれたものだが、いちばん基礎的な音素体系さえよくわかっていないのであまり資料とならない。そこで私は11月なかば、案内のタイ人を連れて行ってみることにした。

ボールワンの西どなりのコンローイという村からゾウで出発した。ウンパイはこの西北方約 30km の山中にある。何せゾウはのろいので、1日目はメーターというカレン部落にとまって2日目に到着した。途中ちょっとした森もあり山をいくつか越えるが、当のラワなら1日でゆうに歩く道のりである。ウンパイにはウンパイ・ルワンを中心としていくつかの部落がつづいているが私はバーンデンという小さい部落にとまった。

ここはさすが山地民の部落だ。地面はブタやニワトリのふんが層をなしてきてきたないことこの上ない。雨期になれば大変だろう。バーンデンは小さいので通りというものはないが、ウンパイ・ルワンやチャンモーは1本の通りをはさんで家が並んでいる恰好の村で、通りにはところどころピー（精霊）の柱が立っている。家や村人の服装も独特のもので、白っぽい上着に紺と赤と白の横じまのスカートで赤や銀の耳輪や首かざりをつけたラワ女性が、米かごや水くみ筒を背負って木かげからヒョイと現れると、ほんものの山地民がはじめての私は何かバカされたような気がした。

例の /mbuak krak/ というスイグユウを槍でつき殺してピーに供える儀式はひと月ちがいで見そこねたが、たまたま家のおほらいがあったのでその祈とうを

録音して後で訳させた。善いピーに向って、この通りごちそうするから悪いピーから守ってくれと頼む主旨なのだが、細かい点では当のラワもこれはピーのことばだからわからないという。

ウンパイ・ラワ、とくに女はタイ人と接触することがあまりないからだろうか、カム・ムアンはあまりできなかつた。しかし男は意外に流暢に話す。私の受けた印象ではボールワン・ラワほどうまくはないが、同行のタイ人などは（ボールワンのカム・ムアンもタイ人には余り完全でないからでもあろうが）同じくらいだといっていた。もちろん、タイ・クラーンはだめだが、そのかわりカレン語（スゴー）ができるという。ラワ族のカレン語の方がカレン族のラワ語よりうまいと自分で言っていたのは、確められなかったが興味をひく。

私は約1週間滞在して帰ることになったが、まだもっと調べたかったのでインフォーマントを1人あとでボールワンに来てくれといった。そうすると約束の日にちゃんとやって来て12月なかばまで約2週間協力してくれた。ある日、村の人がこども連れで山を越えてひょっこり訪ねてきたこともあった。

ボールワン・ラワとウンパイ・ラワは互に自分の方言で話す。だいたい通じているようだ。といっても両者はかなりちがっていて、比較言語学的には大いに興味がある。《手》BL./tai?/UP./te?/のように母音はウンパイの方が簡単だが-VCの種類はウンパイの方が豊富で、《鳥》BL./saiñ/UP./saim/のように後者によってはじめてモン語 /həcem/ などとの関係に気づくといった場合が多い。予想通り概してウンパイの方が古形を保っている。

4 カメート語

ごく大ざっぱに言って、メーサリエン・クンユウム・メーチェム・ボールワンを結ぶ四角形の中にはラワ族の村がまだまだある。その中には極めて興味深い方言もあるかも知れないし、実際に調査してみなければ絶対に何ともいえないけれども、その大部分はまずウンパイやボールワンと著るしく異なることはないだろうと考えて、今度は少し離れてウィエンパパオの「ラワ」とよばれているものに手をつけることにした。

ウィエンパパオはチェンマイの北東約90km、チェンライまで乾期だけ通るバス道路のなかほどの町で

ある。たいていの本にはこの地方の「ラワ」は完全にタイ化してしまったとあるし、チェンマイでもそうきいていたが、目指すパンチョーク村は町から約5kmほど北にあって、そこではまだ「ラワ」語は生きていた。そこで、1月末に入って2週間ほど調査した。

「ラワ」語が生きているといっても家族内などだけで、村の約30戸のうち10戸ほどはコン・ムアンの家であるし、町から5kmくらいしかはなれていないので彼ら自身カム・ムアン（チェンライのそれだが）を話す機会の方が多いようだ。

村は東半分つまりバス通りに近い方にだいたい1軒ごとに垣根のあるコン・ムアンの家が集まり、奥の西半分に彼らの家があって数軒を1つの垣根で囲ってある。村全体あまり裕福でなく近くのスズ鉾で働いたりチェンマイやチェンライに働きに出ている。

さて、この村の住民の自称はカメートまたはラワ・カメートである。ラオスのカメート（ラメート）語のくわしい資料がないので困るが、タイ人のいう「ラワ」がコーラートのニャクオルやナーンのカティンを指すこともあるのと同様のケースであろう。確かにラワ語との共通要素も多いが全体としては明らかに別の言語である。少なからぬ点でカム語（カティン語などとも



写真2 ラワの農作業（ウンパイ）

にいわれるカー諸言語のひとつ)に近い。ビルマのワ語のあるものはウンパイなどのラワ語に近く、他のあるワ語はウィエンパバオのラワ語つまりカメート語に近いといわれているので、ラオスのカー諸語からビルマのワ語まで広く調査しなければ確かな発言はできないが、少なくとも現在の段階ではこのカメート語がラワ語とカム語の中間に立つものと思つてよい。一例をあげれば、《ウシ》BL./mɔup/ : Kmt./Npò? / : Kmu./lmpò?/. 《木》BL./khɔi? / Kmt./khe? / : Kmu./sʔɔŋ/.

単語の形は CV(C)/T, cv(c)CV(C)/T が基本的で、Tすなわち声調があるのはモン・クメル系には珍しいが、これはクメル語やモン語、カム語などにあるレジスターの対立に相当するものである。ラワ語よりも音素の種類が少ないのでききとり安かった。とにかく意外に重要な言語だ。

タイ人がすでになくなったといっていたのにパンチョーク村はあった。ひょっとするとまだほかにも思っているところへ、村の人がほかにも「ラワ」の村があるといひ出した。タコー、ホエイサーン等々である。タコーについては「ラワ」という名でロロ系の言語があることはきいていたがホエイサーンほかは不勉強のためか初耳だ。村はあるがことばはもう忘れていたかも知れないともいうが、当のカメートの例がある。もしかするとウンパイよりもっと古形を残した古いラワ語の生き残りがあるかもしれない。それで、この村からバスでさらに北に向った。

5 ビス語

タコーはパンチョークから 10km ばかりだからすぐに着いた。ところが、村(町?)はコン・ムアンばかりで今度は本当に「ラワ」なぞいそうにない。やっと数人「ラワ」語を覚えている人に出会った。つまり現在では話されているのでなくわずかに“覚えている”人がいるだけだ。ともかくその1人をインフォーマントとして調査した。たしかにチベット・ビルマ系だが自称は「ビシュ」だった。このインフォーマント氏の記憶もはなはだ怪しいので1日で打ちきり、ホエイサーンに行くことにした。

ホエイサーンはタコーからさらに北東 45km ほど、チェンライの南西 25km くらいの地点にある。「ラワ」族の村は山のふもとにあった。村人の服装などコン・ムアンと変わらないが、ここでは「ラワ」語はいた

って健在だ。いったいどの系統の言語かも分からないので、村へつくなり《魚》はどういうか尋ねた。モン・クメル系ならまず /ka/ に近い単語をいうはずだったからだ。ところが /lɔŋtɛ/ という。昨日の「ビシュ」語の /lɔŋtɛ/ と同じだ。自称は /bisù/ だという。古いラワ語の生き残りではなかったのでもいささか失望したが、とにかくはじめてきく言語名だ。今までチベット・ビルマ系としても何系としてもビス語という名はきいたことがない。単語だけでも記録して帰ろうと数日とどまった。

チェンマイに帰ってみると、ちょうど西田先生がタークでの仕事も終えてホテルにおられた。以上の話を報告すると大いに興味を示されて、あまり日もないがとにかく行こうということで再びチェンライ経由で村に行き調査した。

この言語は2音節の単語が圧倒的に多く(形態素は1音節がふつう)、音節は CV(C)/T で、C- には /pj-, hmj-/ といったチベット・ビルマ諸語によくある音素結合がみられる。語順も多くのチベット・ビルマ諸語と同じく、主語—客語—動詞、被修飾語—修飾語などであるが、全体に文法体系は複雑である。語彙の多くはタイ系の借用語で西田先生を残念がらせたが、なかには他のロロ諸語にはみられないような古いチベット・ビルマ系の語彙があり、かなり特殊な言語のようだという事だった。

6 おわりに

今度の調査で、ビスのような副産物は別として、一応ラワ語・カメート語の基本的な構造がわかった。このほかたまたまムアンサイのカム語の語彙を若干採集する機会もあったが、次は何としてもナーン北部のカム語・カティン語などだ。それでやっとモン・クメル系のうち北部山地のグループの手がかりがつかめる。もちろんビルマのワやラオスのカーは分布地域も広く方言もずいぶんありそうだから全体から見るとほんの一部分だ。今回の調査は手がかりの手がかりだといっても過言ではない。

ほんの北部タイだけでも仕事は山ほどあって半年やそこらでできるものではない。そこへもってきて深くか広くかの問題がある。私は今度の調査でさえ多少ウロウロしすぎたのではないかと思っている。もうあと幾日もないが、せいぜい少しでも詳しくと思つて今は再びボールワンに舞い戻っている。

チュラーロンコーン大学

桂 満 希 郎

.....

わたくしは、昨年の6月20日、チュラーロンコーン大学に留学するため、バンコックに来た。そして、同25日、正式に籍を入れ寮に落ち着くことが出来た。以来、友達も増えて、毎日毎日が楽しくて、帰るのがいやになるほどであるが、大学そのものについての知識は全然といってよいほど、とぼしいのである。各学部の学生の数とか歴史とかいったことについては、何も知らない。ついうっかりして調べそびれているうちに日がたってしまったというところである。だから、その様なことについては何も書くことができないので、今までの9カ月の間に色々と感じたことを書いていきたいと思う。チュラーロンコーン大学での学生生活を幾分でも知っていただく上に役立てば幸いである。

キャンパスに入ってまずおどろいたことは、その校舎の立派なことであった。日本の大学を見なれている者にとっては、全くのおどろきであった。全然大学という感じがしないのである。一見したところ、大寺院を思わせる様な屋根や柱の形、色取りである。明るい太陽の下で、先の尖ったミドリとダイダイ色との屋根が輝いていた。しかし、この建物の立派さに感心する反面、随分と無駄なところに金を費いやしたものだという気がした。中に入るとヒンヤリと涼しい。戸外では36°Cくらいあるにもかかわらず、建物の内部に入ると急に涼しくなり、扇風機もルームクーラーも要らない。これで、なるほどと思った。床が地面から離れているので熱気を受けず、厚い壁と太い柱とは外部の熱をさえぎり、天井も高いので暖い空気は上に逃げる。人間の居る所ができるだけ涼しくなるように工夫されているわけである。1年を通じて真夏のような気候の所では、このような建物がもっとも適しているというべきであろう。

このように、一見しただけでは無駄なことのように思われても、しばらくすると、それはそれなりに意義があり、なるほどと思わせるものがある。たとえば、

こちらの学生のほとんどの者が、本やノートにビニールのカバーをかぶせている。これも、はじめは、「うれしそうな」ものだと思ったのであるが、雨期になるとこれが役に立つ、雨期といっても、1日中降り続けることはごくまれで、晴れていた空が急にくもりだしたかと思うとすぐ降ってくる。日本の雨のように、前もって予想しておくことが困難である。そのような時に、このカバーが役に立つわけである。本やノートを保護すると同時に、雨をよけるという役割をも果たしているのである。女子は別として、男子でカサをさげている者は、ほとんど見られない。

わたくしが入ったのは文学部である。この文学部の他に、教育学部、美術学部、政治学部、自然科学部、工学部医学部の各学部がある。これらの学部 (khaná?) の下に、それぞれ、科 (phanëek) がある。文学部にはタイ語・タイ文学科、英語・英文学科、東洋語科、西洋語科、歴史・地理学科、図書館学科の7つの科がある。この科というのは、講義を受ける者からいえば、そうはっきりと分かれているわけではないようである。たたくしが入学したのは、これらのうちのタイ語・タイ文学科である。ここで、タイ語を習得するための特別のレッスンを受けると同時に、普通の講義のうちから興味あるものを選んで出席することとなった。出席はきわめてきびしい。大体にいて日本の大学とちがう点は、この出席がきびしいということと、授業時間数の多いこととであろう。普通、1週間に25時間から30時間くらい出席しなければならない。1時間は45分で休憩が15分あるので短かいように感じられるけれど、このような気候のもとではこの方がかえって能率的なように思われる。そのうえ、宿題が多い。1冊の本、あるいは本の1部を読んでレポートを書くとか、ある問題について短かい論文を提出するとかいった形のものが多い。ただ、誰もが同じような文献や資料を使って、同じようなことを書いているというきらいがある。これだけ授業時間が多く、宿題も多く、そのうえ試験もあるとなると、それについて行くだけで精いっぱい、各人が自分独自の研究を進めて行くことができないのかも知れない。一般に、大学は研究するところというよりも、習いに行くところだという傾向の方が強いようである。日本の大学生と較べると、教室以外での勉強や研究は、余りなされていないというべきであろう。1日中講義に出て、宿題と予習



写真1 チュラーロンコーン大学寮の中

とをすませると、ほとんど時間が残らないといったところである。

講義の内容は、日本の大学のそれと較べて決して低いとは思われない。かえって、基礎的な知識は、授業時間数の多いことと出席・試験のきびしいことにより、日本におけるよりも、より確実に教え込まれているのではなからうか。ただ、その基礎をもとにして独自の研究を進めて行くということは、あまりされていないようである。わたくしが出席した講義で面白いと思ったのは、「タイ語音声学概説」と「タイ語の構造」とである。前者は、まず音声学史及び一般的な音声学を説明したのちタイ語の音素体系の概説に入る。後者は、タイ語の文法体系の記述研究である。若い先生の中には、講義と別に、近代的な言語学の立場からタイ語の研究を進めている人たちが多く。たとえば、先にあげた「タイ語の構造」の他にも、「チェンマイ方言の音素論」やソクラー方言の音素体系に関するものなどがあり、一般に公表されていないのが残念である。タイ語に関する研究は、やはり、進んでいると思う。傾向としては、歴史のあるいは比較言語的研究よりも、むしろ記述的な方面で新しい研究が進められている。先生あるいは卒業生の中には、真剣にタイ語と取り組んでいる人達が多い。これらの人たちにとって、タイ語は母国語であり、タイで話されている他の言語を調査する際にも、自分の言葉を媒介として調査出来るという強味があるのはうらやましいことである。

学生はみな非常に行儀がよく、特に外国人に対して

は礼儀正しく親切である。服装も地味である。日本で予想され勝ちなアロハなどは見られない。男子は、白いシャツに紺のズボンが最も普通で、中には長袖を着てネクタイをしめている者も相当ある。女子は、やはり、白いシャツに紺のスカートで、1年生は全員が白のソックスをはくことになっているので一目でわかる。別に高級品ではなく、ごく質素なものであるが、いつもきれいに洗濯してアイロンを当てたものを身に着けている。日本でいう、いわゆる「南方的」なところなどぜんぜんない。そして、全員が自分は大学生なのだというほこりを持っている。

非常に明るく活発であって、神経質な者や、ノイローゼの傾向のある者などは、まだ会ったことがない。一般に、自分の生活とか人生とかに対して自信を持っており、かいぎ的な態度の者は、ほとんどいない。自殺などということは考えられないのである。良し悪しは別として、日本の大学生よりもタイの大学生の方が幸福そうである。別に、タイにおける方が日本におけるよりも、就職が楽だとは限らないのである。文学部の学生は、卒業後、中学あるいは高校の先生になる者が最も多い。中でも、英語、フランス語の先生が多いように思われる。大学における課題に関しても、英語を取る者が最も多い。英語ができるということが出世の手段の1つとなりうるのだと思う。

学年の始まりは6月中旬である。それからしばらくして新入生歓迎のための行事が行なわれる。朝早くから行なわれ、歓迎パーティーのほかに演劇、音楽、タイダンスなどのもおしがある。2～3日前から会場の準備にかかっているようである。この日に、立派な本が配布される。これから10月中旬までが前半で、この時期に中間考査があり、その後短い休みがある。このような休みにはたいの学生がグループを作って旅行に出かける。費やす時間の割には非常に多くの場所をせわしくまわって行く。去年は、文学部の学生の多くがチェンマイに来た。11月初めから2月下旬までが後半で、最後に学年末試験があって、これが3月20日ごろに終わると夏休みに入る。この休みが1年中最も長い休みである。中間考査ではそれ程でないにしても、この学年末試験の際は、全員が文字通り必

死である。及第点を取ることができなかつた場合は、勿論、追試験はあるけれども、それでも落ちた際には、この失敗した課目を次の年に取るということはできず、もう1度同じ学年をくり返さなければならぬ。このように、各年にいくつかの課目に失敗しているうちに、どうにもこうにも動きが取れなくなって、ついに退学して行く学生もある。試験をやめてレポートを提出させる形を取るとはまれである。試験が終わって夏休みに入ると、皆表情が変わるくらいほっとして、生き生きとするのである。地方から出て来ている学生は帰郷するわけだが、

その前にたいていの者が友達と旅行する。またこの休み中には、厚生福祉局 (Krom prachaasónkhrǒ?) の山地民福祉課 (Koon sónkhrǒ? chaawkhǎw) の主催で、大学生の中から有志者が集って方々の山地民の村の学校へタイ語を教えに行く。これに参加する学生も年々増えているということである。

タイの大学全体についていえることかも知れないが、文学部は特に女子学生が多い。大体90%が女子である。多いとか少ないとかいうよりも、女子の中に男子がわずかにまぎれ込んでいるといった方が当てはまるかも知れない。何故かとたずねてみると、男子学生は、「文学部は就職がむずかしいから、男はみな技術系の学部へ行ってしまふのだ」とこたえ、女子学生は、「男子は知的に女子にかなうものが少なか



写真2 チュラーロンコーン大学の食堂

ったから入れなかったのだ」と答える。わたくしは寮に住んでいたが、男子寮では、文学部に属しているのはわたくし1人だけであった。こちらの女子学生は、男子学生よりもさらにどうどうとしており、ふん切りの悪いようなところは全然ない。物をいう時にも、そのものずばりを実にはっきりと喋る。勉強のよくできる者も、女子の方により多いようである。

わたくしは寮に住んでいた。寮は大学のすじ向いに、通りをへだてて男子寮と女子寮とがある。1部屋に2人が入り、洗面所、洋服ダンス、ベッド、机がついており、日本の大学の大部分の寮よりは居心地がよいのではないかと思う。各部屋には網戸がキッチリとはまっているので、蚊の多いバンコックであるにもかかわらず、蚊帳も線香も要らない。洗濯場と大きな食堂があり何も不自由な点は無いのであるが、唯一つ困るのは、夜やかましいということである。寮の1階はロビーのようになっていて、そこにテレビとステレオが置かれているので、毎晩それを大きくかける。時々どうしてタイ人はラジオを小さくかけることができないのだろうかと思ふ不思議に思うことがある。ラジオとテレビを同時にならしたうえ、楽器をならしながら大声で歌を合唱するグループも出て来る。こうなると勉強も何もできたものではない。寮では余り勉強はしていない。宿題と予習以外のことをやっているのをほとんど見たことがない。本もあま

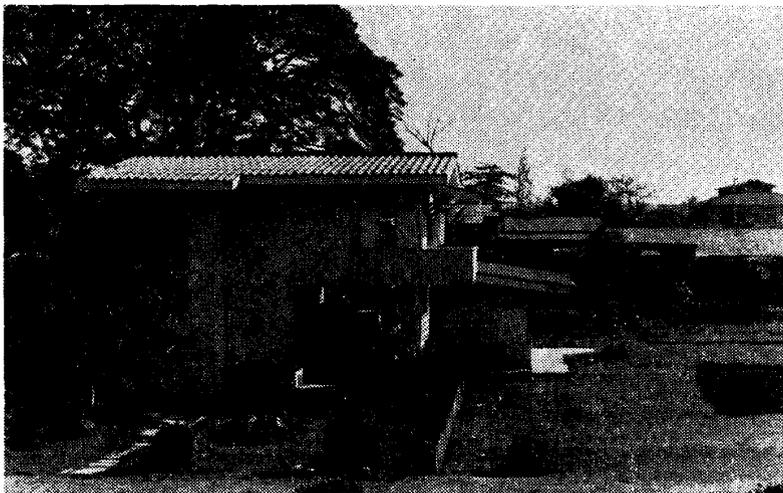


写真3 チュラーロンコーン大学寮



写真4 チュラーロンコーン大学の食堂

り持っていない。読む本はたいてい教室で推薦されたものか、サイドリーダーとして必要なものに限られる。一部の例外を除いて、1人あたり10冊以内しか持っていないようである。これは一般の学生の経済状態と関係していると思う。平均1ヶ月に使う金額は600~700バーツくらいで、少ない者は400バーツくらいである。この割に本は安くはない。タイ語の本で平均30バーツくらい、洋書を買うとなるとどうしても100バーツは出さなければならない。本を1冊買うというのは大変なことなのである。アルバイトをしている学生はいるにはいるけれども、日本におけるよりもずっと少ない。大部分の学生が何かのアルバイトをしていると

というようなことはない。仕事の口がずっと少ないのである。僕の知っている範囲では、中学あるいは高校で非常勤講師をしているもの、印刷屋の校正をパートタイムでやっている者などで、家庭教師をしているという者には、まだ出くわしたことがない。寮の部屋代は1日4バーツである。寮と大学とで食事をすませれば、腹いっぱい食べても1日15バーツですむ。

大学生の好むスポーツとしては、サッカーがあり、ラグビーも好まれている。各大学対抗のサッカー試合には盛大な応援団が集まって来る。もっと日

常的なスポーツとしては、ピンポンとバドミントンとがあり、これらはどこでも行なわれている。伝統的なものには *takrôo* があり、これはビルマの *chînldun* に当たると思えばよい。実にうまい。娯楽の代表はやはり映画であろう。日本の映画もよく知られているが、タイに来ている日本の映画というのはロクなものがないので困る。一般に日本に対する関心は強いのであるが、そのわりにはよくわかっていない。大学生の中にすら、「日本には今でもサムライがいるか?」とか、「日本と朝鮮は同じ国か?」などという質問をする者がいる。

1965年3月28日 チェンマイにて。